
虹に届くまで:番外編シリーズ

爽風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹に届くまで：番外編シリーズ

【Nコード】

N5387Y

【作者名】

爽風

【あらすじ】

虹に届くまでの番外編です。

本編では触れなかったキャラクターの、想いを、描ければと思います。

想いこの愛しい世界を抱き締めて

これは虹に届くまでの番外編です。

本編を是非読んでいただいてからこちらへどうぞ。

本編では触れなかったエピソードや、キャラの視点で書きたいと思っています。短編、読み切りで、読みやすくしたいと思いますので、ぜひお付き合いを、よろしくお願いします。

それぞれに想いがある。

それぞれに誠がある。

それぞれに譲れぬ道がある。

でも、だからこそこんなにも世界は輝く。

この、愛しい世界を抱き締めて走ろう。

いつかくるさよならに、一番の笑顔で笑えるように。

そんな自分を好きになれるように。

君のいない世界1：水瀬明（前書き）

まことが死んだあとの、水瀬家の様子です。
指輪が意外なところから発見されました。

君のいない世界1：水瀬明

「午後八時十分、御臨終です。」

医者の無機質な声が消毒のにおいに満ちた病室に響く。

俺たちは何も言わなかった。

この日が来ることはわかりすぎていたから。
だからもう楽にしてやりたかった。

人工呼吸器を外すと青白いまことの顔があらわになる。

こんなふうに半年以上も眠っていたにも関わらず、髪や爪は少しずつ伸びている。

やっぱり、生きていたのだと思う。

確かに生きていたのだ。

物言わず、自分で満足に呼吸すらできなくてもこいつは生きていたのだと思う。

それが、たまらなくうれしい。

*

まことの葬儀はしとしと秋の雨が降る仏滅にしめやかに行われた。

まことの友達も参加してくれた。

あいつは慕われていたのだろう。

一通り、坊さんのお経が終わり、御棺が閉められる。

花に埋もれたまことはまるで笑っているようにすら見えた。

静かに眠れよ。
お疲れ。

その日の午後、あいつは骨になって戻ってきた。

*

「終わったな……。」

「ああ。」

俺たちは部屋のリビングに腰を下ろし、誰にともなくつぶやいた。
終わった。

まことは死んだのだ。

それがじわじわと実感となって現れる。

「葬式ってさ……やっぱり後に残った人間の気持ちの整理つけるため
にあるんだろうな。前はさ、死んだらそこでおわりだから葬式なん
てどうでもいいって思ってたんだ。でも、やっぱり違うな。
区切りをつけるためにも、やっぱり大事だな。」

珍しく昴が気持ちを吐露した。

「ああ。そうだな。死んだ人間に思いを馳せ、きれいな思い出に変
えて、心にしまつて、残った人間は生きていくんだ。」

司兄貴も、コーヒを飲みながら静かに言った。

ふと俺は思う。事故かなんかで突然死ぬのと、こんなふうにゆった

りと徐々に死へ向かっていくのと、どちらがつらいのだろうと。
まことの死はわかっていた。

だからこそ、こんなふうに今穏やかな悲しみのなかにいるのだろう。

ただわかること、それはまことは死に、俺らは生きていると言っ
ただけ。

俺らは生きなければいけない。

お前のいない世界を。

*

まことの死から3ヶ月、徐々に俺らの日常が戻ってきた。

そしてある日、何の気なしにつけていたテレビに、映されたもの
を見て俺は驚愕した。

” 戊辰戦争時の遺体か？新たな遺品見つかる！ ” という見出しで函
館の様子が写し出され、そのあとに、遺体のそばにあった古びた指
輪がアップになる。

それは…

お袋の形見。

まことが持っていたものだった。

指輪の内側には” t o y o k o , f o r v e r l o v e ”
Forever のつづりが間違っている。

親父が自分で掘ったらしいのだが、大事な結婚指輪の文字を間違え
るなんて、親父らしくて呆れるとわらったことを、思い出した。
それが、なんで五稜郭にある？

まことがもっていたはずのものが、なぜここにある？

雷に打たれたあとどこかに落ちているのではないかと、じいちゃんちを探しても結局見当たらなかったのだ。

しかも、戊辰戦争だと？

150年まえの日本になぜまことの、お袋の形見がある？

発見された遺体は骨格から男性のものらしいとのこと。

専門家のなかには土方歳三の遺体だと言うものもいるらしい。

俺は理解ができなくて吐きそうになった。

そのいたいが土方歳三でも、誰でもいい。

ただ、あの指輪の謎を解かなければいけない気がしていた。

おれは、2週間後、たまっていた有給を使って函館へ向かった。

君のいない世界2：水瀬明

まだ11月なのに函館では雪がちらついている。
吐く息が空に溶ける。

平日の五稜郭には人はほとんどおらず、閑散としている。
俺は記念館に入って、テレビで見た指輪と対面した。
土に汚れ、古ぼけて、確かに150年の月日を重ねていることを感じた。

これは…
まことのだ。

そう実感する。

「指輪に興味がありますか？」

ふと横を見ると、白いひげを生やした爺さんがいた。

「いやいや、失礼。」

ずいぶん熱心にご覧になっておられたので…。」

「いえ。ただ150年前にこんな指輪をもつ人がいたのかなと思いますして。」

俺はあいまいに話を合わせる。
どうやら爺さんは記念館の職員らしい。

「それに関してはかなり議論になっていますよ。」

当時そんな西洋の風習が受け入れられていたとは考えにくいですね。

それを差し引いても、この指輪には謎が多い。

この指輪の横の遺体は男性なのですが、指輪の名前は”Yoko”とあり女性です。冷静に考えればよいことという女性がもっているのが自然なのですが…。」

この指輪に彫られた名前がおふくろで、

それは妹の持ち物だったなんて言えやしない。

ただなんでそれが150年前の遺体の側から発見されたのかはわからないが。

「この遺体は土方歳三のものかもしれないと言われているそうですね。」

「ああ。そんな意見もありますね。

彼の遺体はどこからも発見されていませんしね。

向こうに土方歳三の遺品も展示されていますよ。

彼には函館で夫婦のように暮らした女性がいると言われています。

もしかしたらこの指輪に所縁のある女性かもしれませんね。

島田魁と榎本武陽の日記も展示されていますから興味がありでしたらどうぞ。」

「ありがとうございます。」

俺は爺さんに礼を言って記念館を進んだ。

榎本武陽の日記は事務的なことが多いようだ。

” 明治元年十月二十四日
函館に上陸。
”

”土方は才ある人物なるが、懇意なるは難きと感ずるものなり。”

どうやらあんまり仲良くなかったみたいだな。
俺は苦笑してしまった。

”明治元年十二月十日、新撰組に所縁のある女子土方を訪ねて来る。
その女子容は別段美しきことも無し。”

ずいぶん辛口な評価してんな。
特段美人じゃねえって。

”しかし、いつも笑みを絶やさぬ性質故、新撰組の兵ども慕いし様子なり。土方格別に愛しく慕う様あり。”

土方歳三はこの女と恋人だったのか…。
ふうん。

俺は次に島田魁の日記を見てみた。
豪快な大きな字で、書かれた文字を追って読んでみる。
そこで、俺は驚愕した。

”明治元年十二月、水瀬来る。”

水瀬…？

島田魁の日記の「水瀬」は、日にちから言って榎本武陽の新撰組の女と同一人物だろう。

水瀬、俺の名字、そしてまことの名字。
これは偶然か？

当たり前だ。

水瀬なんて全国に何万というはずだ。

日記を読み進めると、水瀬という人物は土方歳三と恋人同士だろう
ということがうかがえた。

” 明治二年、五月十一日、午後、土方死す。
夕刻水瀬消えゆ。そのさま夢幻のごとし。”

消えた？

姿を消したということか？

函館を去って水瀬という人物はどこへ行ったのだ？

俺の中で警鐘がなっていた。

150年前の遺物として出てきたおふくろの形見
戌辰戦争時の函館に現われた水瀬という女。

これは…偶然か？

ぐうぜんなのか？

俺は謎を抱えたまま翌日東京へと戻って行った。

君のいない世界、もう一つのエピローグ：水瀬明

東京に戻っても釈然としないものをずっと抱えていた。

どんなに悶々としていても何もならない。

「明、まだ気になってんの？
まこの指輪の件。」

昴が風呂上りにタオルで頭をガシガシ拭きながらリビングのソファにどっかりと腰を下ろす。

「うん…まあな。」

「わけわかんないよな。結婚指輪で、Foreverのつづり間違えるなんて間抜けな間違い親父くれえしかなさそうだし。でもそんな指輪が150年前の函館にあったなんて信じられねえよ。やっぱり、ほんとに偶然なんじゃねえの？」

昴はビールのプルトップを開けて勢いよく流し込んだ。

「なあ、昴。」

「ん？」

「タイムスリップとか信じる？」

俺はずっと考えていたことを口にした。

口に出すと、ひどく非現実的ではかばかしく聞こえる。

「はあ？いい年して何言ってんだよ。」

昴は吹き出したビールを手の甲でぬぐう。

「だよなあ。」

その様子を見て俺は苦笑した。
当たり前だ。

そんな歩現実的なこと、起こりうるはずがないのだから。

「あつたりまえだろ。第一タイムスリップってまこはずっと病院で寝てたじゃん。タイムスリップだったら行方不明じゃないとつじつま逢わねえよ。」

「ああ。そうだな。」

「つたく、しっかりしてくれよ。
じゃあ、俺寝るわ。お休み。」

「おう。」

去っていく、昴に片手をあげる。

そうだ、そんなはずがない。
ただの偶然のはずだ。

それなのに、なんでこんなにも引つかかる？

*

函館から帰ってきた翌週の週末、俺は中央線に揺られ、日野の土方歳三の生家を訪れていた。

正気の沙汰ではないと思う。

ただ、よくわからないが行かなければならないと思ったのだ。

妹がタイムスリップしたかもしれません。

なんて誰にも言えるはずもない。

ただ、このよくわからない衝動に駆られてもたつてもいられなくなったのだ。

土方歳三の墓に墓参りする。

しかし、新撰組についてのはすげえ人気なんだな。
と改めて実感する。

アニメのキャラクターなんかも備えられていて、それはちょっと違うんじゃないかなんて思いながら苦笑した。

まあ、俺のほうがちが悪いか。

妹の死んだ原因をつじつま合わせにしようとしてんだから。

墓参りの後、俺は歩いて土方歳三の生家の隣にある記念館を訪れた。そこには生前、使われていた刀や、有名な写真、多くの芸者からもらったというラブレター、小姓市村鉄之助が届けたという手紙なんかが表示されていた。

そこには確かに土方歳三という歴史の英傑が生きた痕跡があるように、身がひきしまる想いだっただけ。ただ島田魁が書いていた水瀬という人物につながるものは何もなくて、俺はがっかりしたようなほっとしたような複雑な気分だった。

当たり前だよな…。

そんなことあるはずがねえんだ。

俺は自嘲気味に笑った。

初冬の木枯らしが一つ俺の横を通り過ぎて行った。

「あなたも新撰組のファンですか？」

不意にえらく顔の整った男が声をかけてきた。年は俺よりも七八こ上か、大人の男って感じで、妙に居心地が悪くなる。

「えつと…。」

「ああ、すみません。最近若い女の子が多いから。珍しいと思って。」

いたずらっぽく笑ったその人の顔は妙に見覚えがあったけれど、誰なのかは思い出せなかった。ただ妙に落ち着く笑顔で、俺たちは初対面なのに気が合って近くのカフェで話を弾ませた。

「新撰組のファンなんですか？」

彼は内藤隼人という人で、歳は34だという。

「いや、少し、気になることがありました。」

俺は信じられないことに、これまでの経緯を話してしまったのだ。妹が雷に打たれて死んだこと。

その妹が持っていたはずの母親の形見の指輪が函館で150年前の遺物として発見されたこと。

島田魁の日記に記されていた土方歳三の恋人の名前が水瀬という名前前で、自分たちの名字と一致すること。

そんなことを赤の他人のこの人に話してしまったのだ。

その人は黙って聞いていたかと思うと話が終わった途端、はらはらと涙をこぼした。

「すみません。つまらない話をしました。」

俺は狼狽して謝る。

「いいえ。違うんですよ。」

ようやく時が廻ったのだと。そう思ったのです。」

「え？」

「あなたの妹さんは確かに時を越えましたよ。」

そして土方歳三と共に走り、函館の地に眠りました。」

「何を……!？」

内藤さんが当然のように言うものだから俺は面喰ってしまった。

「土方歳三の辞世の句ご存じで？」

「…」

耳鳴りがする。

これ以上聞着たくないのに、内藤さんの声は低く響く。

「たとひ身は蝦夷の島根に朽ちぬとも魂は東の君やまもらん…

これは土方歳三が市村鉄之助に託した手紙に書かれていたもの。

世間にはこの歌は徳川への忠誠の歌としか伝わっていないでしょう。でも、この歌には続きがあるのです。

”わが魂のすべてはまことのために。時を越え、再び出逢うことを願って。”

そう書かれていたのです。

”水瀬真実という時を越えてきた女性と出逢い、恋に落ちたと。

いつか遠い先の世で水瀬真実のご家族にあつたらこのことを伝えてほしいと。

大切な家族を奪うようなことをして本当に申し訳ないと。

でも自分が魂のすべてをかけて幸せにするとそう伝えてほしい”と彼は願ったのですよ。”

俺は信じられない思いでいっぱいだった。

そんなこと起こりうるはずがない。

そんな夢みたいなきっかけが起るはずがない。

「あなたは…いったい…」

彼はその問いには答えずに染み入るような笑顔で笑った。

「ようやく時が廻りました。

またようやく時の輪の中に戻れます。」

「え？」

一体それはどういうことなのか…？

内藤さんを問いただそうとしたとき、強烈な耳鳴りと頭痛に俺は机に突っ伏した。

…
…
…！！

夢を見た。

まことがいる。

正月みたいに着物を着て、髪をまとめている。

俺の記憶の中のまことよりも少し大人びて見えた。

まことは軍服を着た男と肩を寄り添わせ、楽しそうに話している。

その軍服の男は内藤さん…いや、どうして気が付かなかったのだろう。

その人は記念館の写真で見た土方歳三その人だった。

すっきりと整った顔立ちや恵まれた体軀は文句のつけようもない男で、そして何よりまことが見たことも無いほどに幸せな笑顔を

浮かべていた。

そして土方歳三の顔にも、まことへの恋情と慕わしさにあふれていて、泣きたくなるくらいに幸せな光景だった。

ああ、まこと、お前、幸せだったんだな。

「……さん。

お客さん！

……大丈夫ですか？」

え？

目を開けると、カフェの店員さんが困ったような顔で俺を覗き込んでいる。

「入ってきた途端急に突っ伏して、だいじょうぶですか？」

「え？あの俺と一緒にいた人は？」

「そんな人誰もいませんでしたよ。

はじめからおひとりだったじゃないですか。
大丈夫ですか？」

「一回病院に行ったほうが……。」

「いいえ、大丈夫です。」

俺は支払いを済ませて逃げるようにそのカフェを後にした。

後で調べたら内藤隼人とは、土方歳三が使っていた偽名らしい。
でも俺は不思議とすっきりとした気分でした。

きつと俺があつたのは土方歳三だ。

きつと妹をもらう挨拶をしに来たのだ。

律儀な奴。

そう思うと笑いが込み上げる。

例え俺が作り出した都合のいい幻だとしても、それでいい気がしていた。

まことは死んだ。

雷に打たれて。

それはうごかしようのない事実。

でももしかしたらその魂は幕末で、土方歳三と共に走ったのかもしれない。

ただあいつは、あのまつすぐな妹はきつとどこまでも土方歳三に惚れぬいて、幸せに死んでいったのだろう。

あの夢の中の二人はどこまでも幸せそうで、何物も侵せないような強いきずなで結ばれていることが見て取れた。

都合のいい解釈かもしれない。

途方もない、ばかばかしい夢物語かも知れない。

でも、あいつはきつと幸せだった。

そう確かに思える。

それでいい。

ただそれでいいと思った。

風が吹き抜けた。
まことの笑い声が聞こえた気がした。

君のいない世界、もう一つのエピローグ：水瀬明（後書き）

まことの死後のお話です。

二男の明が語り手。

土方さんがまさかの登場です。

これから歩いていくまことの家族の終わりで始まりの話にしようとおもい、番外編第一弾に持ってきました。

次はもうちょっとコミカルな感じので行きたいです。

女らしさ。 前編：水瀬真実（前書き）

時間的には文久三年の秋ごろ。

女らしさに悩むまことです。

酔っ払ったまことは何をするのでしょうか？

女らしさ。前編：水瀬真実

夕暮れともなると、風がずいぶん冷たくなってきた。

あたしは左之さん、永倉さん、平助君の三バカトリオと一緒に京の町を散歩していた。

そろそろ帰ろうというその時。

「あの、水瀬様！」

突然呼び止められて振り向くとそこには小柄な女の子。

緊張しているのか、髪にさした花かんざしが震えている。

俯いていて顔はよく見えないけれど、着ているものなんかを見ると、いいとこの御嬢さんって感じた。

「水瀬さまでございますか？」

「えっと…そうですが何か御用で？」

そのこは勢いよく顔をあげるとあたしと目が合った瞬間暗がりでもわかるくらいに顔を真っ赤にしてまたすぐに俯く。

「あ、あの…」

「大丈夫ですか？」

あたしが手をさしのべようとしたその時。

女の子はその手に持っていたものをあたしの目の前にずっと差しだした。

それは結び文。

紫苑のかわいらしい花に結び付けられてあるそれはまさしくラブ
ター。

「ずっとお慕いしておりました。これ、読んでください!」

そのこは一気に言い切ると頭を膝に付くのではないかと思うくらい
に下げて踵を返すと走り去っていった。

「あーあ。また水瀬かよ。

これで何人目だ?」

呆然とするあたしをしり目に左之さんが面白そうに笑う。

「俺の知る限り一三人目。うらやましいねえ。」

平助君もシャムネコみたいな意地悪な笑みを浮かべた。

「ばか、一九人目だろう? 色男水瀬の実力なめんなよ?」

永倉さんはにやにや笑って言った。

「『モテる男はつらいねえ』」

「あたしは女だっつの!」

ハモった三バカに向かって吠えるあたしはやっぱり女としての魅力
が欠如してるんだらうか。

こんなふうに一方的に女の子に告られるの何回目よ？

*

あたしは屯所にもどってご飯の後に縁側でもらった手紙を読んだ。
あの子はあたしを男だと思ってるけど、それでもあたしを想って想
いを伝えようとしているんだなって思う。

ああ、恋する乙女っていつの時代も変わらないんだなって想う。
好きで好きでどうしようもなくって…

そんな想いがひしひしと伝わってくる。

あの子かわいかったな。

恋する乙女って感じでキラキラしてて。

全部が砂糖菓子みたいに儂くて守ってあげたい雰囲気のかわいい子
だった。

手も細くて小さくて…

剣だこだらけのあたしとはえらい違い。

寝転がって自分の手をかざしそんなことを思い、思わず苦笑した。

この道を選んだのは誰でもないあたしだ。

守られるくらい儂い女だったら、あたしは今ここにいない。

いられなかった。

だからいいんだ。

そんなふうに自分を納得させたけど、やっぱりどこかでうらやまし
いと思ってしまう自分を止められなかった。

「おい。まこと？起きてる？」

ふと衝立の向こうから総司の声。

「うん。起きてるよ?」

「今からうちうちなんだけど飲もってなんてるんだけど、まこともおいでよ。」

「うん!」

まあ、くよくよしてもしょうがないよね。
飲んで楽しくなっちゃえばいいか。

あたしは総司と並んで部屋を後にした。

*

試衛館のメンツがそろってみんな思い思いに飲んでいる。

大分お酒が回って左之さんはいつも通りに腹踊りをしてみんなに流されてる。

あたしも熱燗がおいしくて永倉さんと飲み比べをしてしまった。
ふと落ち着いた頃、平助君が思い出したように昼間の出来事を話した。

「まあ、水瀬君は並みの男などよりもよほど頼りになるし、惚れる女子がいても無理はないなあ。」

近藤先生が冗談とも本気ともつかない慰めをしてくれるなか、あたしは苦笑しながら杯をすすめた。

「腕っぷしも強いし、潔いしね。」

加わる山南先生。

「だが胸も色気もねえと。」

土方さんは意地悪そうににやりと笑って付け加えたのを聞いて、あたしはカチンときて口を開く。

「なんで胸も色気もないってわかるんですか？あたしだって着飾ればそれなりに……むりむりむりむり！」

あたしの主張を食い気味に遮ったのは左之さん。

「お前には女の色気がねえんだよ。」

なんつーか匂い立つようなあでやかさっての？」

「そんな……」

「まあねえ、色気があるかないかで言ったら無いかもね……。」

と総司。

「水瀬が女なんて俺、今でも信じられねえし。」

と永倉さん。

「まあ総司と互角に戦える女なんて信じられないよね。」

と平助君。

「うむ。女子としての色香は少々足りぬように思う。」

くっ 斉藤さんまで！

好き勝手言う男どもになんだか無性にいらする。

今迄だってこんなこと嫌ってくらい言われてきた。

笑って流すことくらいわけないはずなのに。

あたしは腹が立って、目の前にある徳利をそのままらっぱ飲みした。
のどを甘苦い日本酒が滑り降りる。

畜生！

むかつくな。

「いよ！いいねえ。さすが男の中の男！」

誰から発せられたかわからないそんな言葉に無理やり笑う中、心の自分はどんどん冷えていくのがわかる。

「そんなだと嫁の貰い手無くなるぜ！」

どれくらい飲んだのか覚えていないけれど、そんな言葉が聞こえた瞬間、あたしの中の何かが崩れた。

あたし…女として欠陥なのかもしれない…。

ばらばらと涙が零れ落ちる。

「え？おいおい水瀬…。なんで泣いてるんだよ？」

周りの人が困惑しているのがわかったけど、どうにもならなかった。
酔っぱらってるせいで感情のコントロールが聞かない。

もうこんな勝手なこと言わせたくない！

もうこんな男みたいな自分は卒業だ。

見てろよ。

絶対色気のある女になって見せるんだから！

「あたし、女らしくなる！！！」

やけっぱちのようにこぼれた言葉はこんなものだった。

それから後の記憶は無い。

女らしさ。 後編：斉藤一

「あたし女らしくなるもん！」

いきなり泣き出した水瀬が何を言うのかとあぜんとしてしまう。
そもそも誰だ？

こんなに飲ませたのは？

水瀬の周りには空になった徳利が何本も転がっている。

いつも酒盛りの時は誰かしらの介抱にまわる水瀬のこんな姿初めて見た。

「もう男みたいなんてぜつったいいわせないんから！」

舌が回っていない。

「胸も色気もある女になるんから！！」

副長がからかった言葉によほど傷ついたのか、乳に妙にこだわる。

まあまあと源さんにいなされると水瀬はうんうんと子供みたいに頷き、

それからしばらくしてその場にこてんと突っ伏してそのすぐあとにはすーすと寝息が聞こえ始めてきた。

「にしても…水瀬のことちょっとからかい過ぎちまったか？」

原田さんがすまなそうに言う。

「なんだかんだ言っても女の子だしな。」

永倉さんも苦笑していった。

すまないことをしたと思う。

確かに年頃の娘に向かって言う言葉ではなかった。

ただどんなものであるうとも、水瀬は水瀬で、俺たちにとってかけがえのない存在なのだが…。

「まあ、今日はお開きにしようか。」

「ああ。じゃあ、片づけは明日の朝でいいな。じゃあ、おやすみ。」

「おう。」

水瀬が寝てしまったのをきっかけに皆ばらばらと帰ってゆく。

沖田さんは夜の巡察の準備に部屋を出ていき、その部屋には俺と水瀬の二人だけになった。

眠ってしまった水瀬を担ぎ上げようとするが、ここがいいとでも言うように少し眉をひそめて首を振る。

そんな水瀬の様子を見ると、としよりもずっとあどけなくて女子なのだと想う。

水瀬に羽織をかけると、その隣に腰を下ろした。すこしからかいすぎたか。

ああ。こいつのこのまっすぐさや凜とした心根は俗っぽい色気よりも何倍も価値があるのに。

どうやら女子心とはずいぶん複雑なものらしい。俺は苦笑した。

不意に部屋の隅でござと音がする。

俺はその音の先を見て唖然とした。

水瀬がござと着物を脱いでいたのだ。

「つつおい！」

俺は口を手で覆った。

水瀬は髪のがれが気になったのか、元結を解き、肩を少し超すくらいまで伸びた髪を垂らしている。

袴を脱ぎ、長着の腰ひもに手をかけた瞬間、俺は水瀬の行動を止めに入った。

「なんなんですかー？」

「たのむからやめてくれ！」

お前のほうが落ち着けと言われんばかりのあわてようだったがそれも仕方あるまい。

愛しい女が下着同然の恰好で、それすらも取り払って肌を見せようとしているのだから。

「だって暑いんです。それにさらしが苦しいから。」

そしたら今はずいぶん涼しかりう。

水瀬はこともなげに言つてのけると、長着から肩を出してさらしをするすると解きだした。

「をいっ！！」

こいつが脱ぎ癖があるなんて知らなかった。
兎に角こんな誰に見られるかもしれぬ宴会部屋ではまずい！

「とにかくこちらへ来い！」

俺は水瀬を着物でくるむと無理やり担ぎ上げて、俺の部屋まで連れてきた。

何やらしれぬ苛立ちで眉間にしわがよる。
ばさりと蒲団の上に水瀬を放り投げる。

「うーん、いたーい。」

するか。

まったく。

大体警戒心がなさすぎるではないか。

というよりも、いつもの水瀬と落差がありすぎて、同じ人物とは思えない。

水瀬はこんなふうに甘えたり、絡んでくる人間ではなかったはずだ。

「くすくす、うふふ。」

何がおかしいのか水瀬は一人で笑っている。

頬を上気させて、しどけなく着物を着崩しているこいつに俺の理性は限界だった。

誰だ。こいつに色気がないなんて言った奴は。

この場でこいつに欲情しない男がいるのならお目にかかってみたいものだ。

なにを思ったか、不意に水瀬は俺の首っただけに抱きついてきた。

こちらの気もしらず無邪気な笑顔を浮かべたままで。

「!!!!!!」

日ごろの鍛錬には自信があったはずなのに。

水瀬の不意の攻撃をよけきれなかった。

不覚だ!!

「や、やめろ!」

俺は水瀬を引きはがそうとした。

しかし酔っ払いの力というのは案外強いもので俺は苦戦していた。

そんなに体を不用意に押し付けるな!

さらしを巻いていない胸が俺の腕に押し付けられる。

やわらかいそれに意識が向かうのを止められない。

だめだ!

考えるな!

俺は水瀬の腕をつかんで少し力をこめて水瀬を引き離す。

その拍子で、俺は図らずも水瀬に覆いかぶさる形になる。

ドクン、ドクン…

まずい…。

このままこうしていたら非常にまずい。

そう警鐘がなっているのに、俺はその体制から動くことができない。

水瀬は相変わらず無邪気に抱きついてくる。

俺の頬に頬をすりつけてくすくす笑っている。

素面のこいつだったら絶対にしないであろう。

まったく勘弁してくれ。

押し付けられるその柔らかさも、頬の滑らかさも、もはや理性の限

界だ。

俺は水瀬の体に手をまわしておもむろに引き寄せた。
高まる胸の音。
熱くなるからだ。

不意に耳元で水瀬が小さく笑った。

「ちくちくする。うふふ。」

「当たり前だろう。夜半になればひげも伸びる。」

「なんかあつたかくて落ち着く。」

俺はまったく落ち着かない。

「水瀬…」

「ん？」

「いや…何でもない。」

それからおれは覚悟が決まらずにただ水瀬を抱きしめていたのだが、
水瀬の力が抜けたと思ったら耳元で寝息を立てだした。

俺は馬鹿らしくなってごろりと横に寝転がった。

こんな据え膳目の前にしてまだ手が出せないなんて俺はなんて意気
地がないんだ。

そんな自分に苦笑してしまった。

ただどんなに意気地がないと言われても今はただこいつの側で見守
ってやりたかった。

安心しきって眠っているこいつを見ていると俺のほうもとろとろと眠りに落ちて行った。

*

翌日

「ええーっ！」

水瀬の叫び声で目を覚ました俺は昨晚のことをどう説明するかでまた肝を冷やすのであった。

女らしさ。おまけ

これって…

この状態ってまさか…

やっちゃった？

瞼をさす光で目が覚めると、どあつぷで斉藤さんの寝顔。

どうやらあたしの部屋ではないみたいで、斉藤さんの腕はあたしの腰に回っている。

いつの間に外したのか胸のさらしもないし…。

ばかばか飲んで「女らしくなる」宣言した後の昨日の記憶が全くない…。

あたしは全身から冷や汗が流れるのを止められなかった。

マジで？

いやでもこの状態は…状況証拠がそろいすぎてるって…

ヤバイ。

女らしくなるってあたし何やってんの！！

「大丈夫か？」

あたしが蒼くなっているのを見ていつ目を覚ましたのか斉藤さんがこちらを見ていた。

「さ、斉藤さ…。」

「体は辛くないか？」

「ってやつぱりあたしやっちゃったんですか？
あたしは一瞬にして顔に血が上るのを感じた。」

「っあの…。」

「昨日はずいぶん激しかったからな。」

「激しいって、あたしそんなだったんですか？！」

「あたし…ホントに…」

ふと不意に真面目な顔をしていた斉藤さんが噴出した。

「え？」

「いや、すまぬ。」

「昨日お前が酔っぱらって脱ぎだしたものだから俺の部屋で保護しただけだ。」

「したくなるのはやまやまだが、何もしていない。」

「斉藤さんが笑いをこらえながら言った。」

「したくなるのはやまやまって…」

「てかあたし脱いで斉藤さんに迫ったんだろうか？
最悪…。」

「ほんつとにすみません！…！」

あたしは着物の前を合わせて頭を下げた。

「まあ、よいものも見られたし気にするな。
ただし、もう記憶をなくすほど酒を飲むのではない。」

「はい!~!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5387y/>

虹に届くまで:番外編シリーズ

2011年11月29日15時00分発行